



窮理の部屋73

苦楽園

科学館が建っている中之島4丁目2番地は、かつて大阪大学理学部があった場所です。その理学部の建物を知っているという方はあまりいないでしょうが、細い道を挟んで北側、現在広い駐車場のところにあった医学部は、科学館がオープンした頃にはまだ残っていましたので、こちらは憶えている方が多いかもしれません。そんな大阪大学(大阪帝国大学)が創設されたのは1931年(昭和6年)、当初はこの医学部と理学部だけでしたが、理学部の本館が完成したのは1934年のことでした。なお、その理学部本館の地階と1階をぶち抜いた部屋に、当時最新式であったコッククロフト・ウォルトン型加速器が作られ、その一部は、現在、科学館の4階に展示してあります。



写真1 . コッククロフト・ウォルトン型加速器

一方、1929年に京都大学を卒業した湯川秀樹は、1932年春に結婚、そして京都大学で講師を始めました。ちなみに、湯川という姓は結婚相手のスミさんの姓で、湯川秀樹は旧姓小川といいます。結婚を機に、湯川秀樹は大阪の内淡路町(大阪府庁の少し西)に住むようになり、そこから京都に通っていたのですが、大阪に住んでいるということもあり、1933年から大阪大学の講師も兼任することになりました。ところが、義父の静養のため、湯川秀樹はすぐに()西宮の苦楽園に引っ越ししたのです。

苦楽園は六甲山の東端に位置していて、明治末から大正にかけて開発されました。苦楽園という名は、開発した実業家中村伊三郎が家宝として大切にしていた「苦楽瓢」という名のひょうたんに由来しています。近くで湧出したラジウム温泉を引いたりもして、大正時代には別荘地・避暑地として苦楽園は栄えたのですが、湯川秀樹が引っ越しして来た頃には少しさびれていました。湯川秀樹の散歩コースにも、完成せずに廃墟となったホテルがあったとのこと。このホテルがあった辺りは、現在、西宮北高等学校になっているのですが、湯川秀樹の家とは100m近くも標高差がありますので、ずいぶん汗をかいて息も切れそうな散歩ですね。

その西宮北高等学校の向かいには苦楽園小学校があり、校門を入ったところに、

「未知の世界を探求する人々は 地図を持たない旅人である」と刻まれた碑があります。これは中間子論誕生50周年に建立された記念碑です。

というのも、湯川秀樹のノーベル賞受賞の対象となった中間子論は、この苦楽園に住んでいた時代に作られたのです。湯川秀樹は、夜、寝床に入ると新しいアイデアがいろいろと浮かび、そのアイデアをメモしては翌日に計算し...ということなので、中間子論の



写真2 . 中間子論誕生記念碑

発想は、まさにこの苦楽園の地でなされたのです。

当時、湯川秀樹が住んでいた苦楽園の家は、残念ながら建て替えられて残っていません。しかし、離れだけは当時の面影を残した状態で残っており、現在も別の方が住んでおられます。この離れには書斎があり、当時の姿のまま大切に残されています。



写真3 . 湯川秀樹の書斎があった離れ

(1)によると、新しく苦楽園に建てた家に住んだのは1933年夏からで、前年の夏には家を借りて一夏を苦楽園で過ごしたとありますが、(2)によると、苦楽園の家の棟上げ式は1934年3月となっていて、1年食い違っています。

参考文献

- (1)湯川 秀樹 著『旅人 ある物理学者の回想』
角川ソフィア文庫
- (2)湯川 スミ 著『苦楽の園』講談社
- (3)柘植 宗澄 著『苦楽園八十年の歩み』

(長谷川 能三：大阪市立科学館 学芸員) 2005年は世物理年

